

イギリス詩人 W. H. オーデンの到達点としての中国

1930年代世界文学としての *Journey to a War*

藤田萌々子

はじめに：1930年代における「異質な付録」としてのソネット連作 “In Time of War”

1930年代を代表するイギリス詩人 W.H.オーデン (1907-73) は、1938年1月末に彼の作家仲間のクリストファー・イシャーウッド (1904-86) とともに日中戦争 (1937-45) の戦場と化していた中国本土での約4か月にわたる取材旅行へと出発した。その成果として出版された *Journey to a War* (1939; 以下 *JW*) はイギリスとアメリカの両国で相次いで出版され、多くの読者を獲得した。*JW* の特徴のひとつが、作品内でのジャンルの混淆である。*JW* には、イシャーウッドによる散文とオーデンによる詩に加えて、オーデンの撮影による写真、中国の地図が収録されている。従来のオーデン研究では、特にソネット連作 “In Time of War” (以下 “Time”) だけを取り上げるものが多くみられる。しかし、旅行記の中に詩が挿入されているという形態にこそ、日中戦争旅行記としての *JW* の独自性を見出すことができる。本発表では、1930年代英語圏出版市場における *JW* を取り巻く状況に注目し、従来単独で分析されていた “Time” を、「旅行記の中に挿入された付録」としての再評価を試みたい。

Far East という主題と 1930年代英語圏文学市場における世界文学

JW という書籍が誕生するに至った経緯について、*JW* の前書きには、1937年の夏にイギリスの Faber and Faber 社とアメリカの Random House 社から合同で “to write a travel book about the East” (495) という出版助成契約を結んだこと、そして日中戦争の勃発を機に “Far East” (495) へと執筆対象を決定した過程が記されている。英語圏読者の東アジア情勢への関心は、1840年のアヘン戦争以来、1911年の辛亥革命を経て、1931年の満州事変を契機として高まりを見せており、出版市場もその例外ではなかった。1930年代の英語圏出版市場では、Far East を主題とする文学作品が国境を超えて流通してただけでなく、英語以外の言語で執筆された Far East を主題とする作品も次々と英訳されていた。レベッカ・ウォルコウィッツが *Born Translated* (2015) の中で、出版された後の受容 (世界中に普及したかどうか) ではなく翻訳という行為に注目し、作品の形成過程から世界文学の動態を分析したように、1930年代のイギリス文学においては、Far East を主題とする文学作品の数々が原語の違いを超えて流通しており、世界文学的なネットワークを形成していたのである。

世界文学を描き出す *Journey to a War*

JW の大部分を占める、日記形式の取材旅行記 “Travel Diary” 部分の随所には「フィクション作家が Far East を語る」という行為の系譜に *JW* を位置づけようとする試みが見られる。中国育ちのアメリカ人作家パール・バック代表作 *The Good Earth* (1931) を意識したフレーズである “the Bad Earth” (532,547) を用いることで、バックが描いた中国の農民たちの支えであった *The Good Earth* が、日中戦争によって戦地と化し “The Bad Earth” に変わり果てた姿を強調している。さらに、フランス人の外交官作家アンドレ・マルロー (1901-76) による、1927年の上海での労働者蜂起をモデルにした小説 *La Condition Humaine* (1933; 34年に英訳) のタイトルを引用するなど、(527, 664)、Far East を描いたフィクション作品への言及が散見される。

また、イギリス人作家による中国旅行記の系譜への強い意識も、オーデンと同年の作家であるピーター・グレミング (1907-1971) への言及から読み取ることができる。グレミングと中国で合流し行動を共にする場面では、グレミングが旅行記の主役然としている姿を描写し (611)、イギリス人旅行記作家の典型としてテキスト内に取り込んでいる。さらに、*JW* の前書き部分において、オーデンとイシャーウッドともに中国語や中国情勢に関する知識が一切ないことを弁明している箇所 (Auden 495) は、1934年に出版され人気を博したグレミングによる中国旅行記 *One's Company: A Journey to China in 1933* (1934) の前書き “Warning to a Reader” を踏襲しており (Fleming 9)、グレミングの旅行記を一種の典型として *JW* を構成したことが分かる。さらに、オーデンが英語で書いた詩作品が中国語に翻訳されて現地の新聞に掲載されていく過程も描かれている (579)。オーデンの作品が翻訳という行為を通じて同時代の中国人読者に読まれ、その詩の英語版が *JW* 内に実際に掲載されるという状況そのものからも、*JW* を世界文学の一翼を担う作品として自己定義している姿が読み取れる。

日中戦争をグローバルな視点から語るソネット連作

“Time” においては、日中戦争に関する記述にとどまらず、グローバル・ヒストリー (従来の一国史の枠組みや

西洋中心的な歴史観から脱却し、世界各地の共時的かつ有機的なつながりを見出す語り方) 的な叙述が展開されている。従来の“Time”のみに注目する作品論においては、全27作品のソネットのうち1番から16番までの前半部分は日中戦争に至るまで、そして17番から27番までの後半部分では日中戦争が始まってからの様子、という順に通史的な叙述がなされていると理解されてきた (Fuller 235)。しかし、1930年代世界文学の文脈を踏まえて読み直すと、いわゆる人類共通の課題ごとに各ソネットが構成されており、1番から16番までの前半部分にも1930年代のFar East情勢に関する記述が随所に見られる。

ソネット5番ではコミュニティのリーダーが次第に暴力性を帯びていく姿が描かれており、“[he] took to drink to screw his nerves to murder // Or sat in offices and stole” (669) と、酒に溺れて殺人行為や略奪行為に走る姿が描かれている。この記述は“Travel Diary”に記述されている、普段は規律を守っている日本軍兵士たちがひとたび酔うと暴力行為に走る姿 (543) に重なる。このように“Travel Diary”と“Time”を併せて読むことで、ソネット5番の主語である“He”が、特定の戦争や一国史の枠組みに囚われることなくあらゆる人間に内在する暴力の普遍性を強調していることが明らかになる。

ソネット12番では超自然的な信仰の衰退と近代化の様子が描かれており、その象徴として“A sterile dragon lingered to a natural death” (672) と龍の死が描かれる。その前後に“the heath,” “[t]he kobold” (672) といった西洋的なイメージが並べられていることから、西洋での中世から初期近代への近代化を描いているというイメージが先行するが、中国で1911年に発生した辛亥革命と、龍を国旗に掲げていた清王朝の終焉をも想起させる。次世代へ王朝を継承できなかったという意味で“sterile”な龍の死を描くソネット12番は、西洋と中国の近代化を同時に取り込んでいるといえる。

そして、リルケのソネット様式との類似が指摘されてきたソネット13番では、“our star has warmed to birth” と星が誕生し、エドガー・スノー (1905-72) の *Red Star over China* (1937) が取り上げた中国共産党を暗示していると考えられる。さらに、伝統的に「内地十八省」という中国領土の総称である “the Eighteen Provinces” (673) への言及を行うことで、中国の領土に誕生した星の姿へと視線を集める。オーデンとイシャーウッドは、取材旅行中に中国国民党側の要人に会う度に中国共産党との国共合作の未来について質問しており、共産党の存在を意識しているところが随所にかがえる。ソネット13番もまた、“Travel Diary”での記述と関連しているのである。

そして、従来の読み方では日中戦争の記述が始まる箇所とされるソネット16番では、Far East と西洋世界と同時代の問題意識が接合される。冒頭の4行連では、所在地不明の作戦参謀の様子が示されるが、最終3行連で “And maps can really point to places / Where life is evil now: / Nanking; Dachau” (674) と具体的な地名が登場する。当時から駐中ジャーナリストたちによって盛んに報じられた南京事件 (1937) の舞台と、ユダヤ人強制収容所の起源となり、同じく英語圏新聞各社が取材していたダッハウという地名を2つ並べただけの詩行をあえて最終行に挿入し、Where life is evil now という行の now を Dachau という外国語の固有名詞と韻を踏ませることで、人々の生命が悪の手によって脅かされるという危機的状況が現在進行形で発生していることを強調しているのである。

おわりに

本発表では、*JW* 執筆の背景にある1930年代の世界文学ネットワークを検討し、作品中で積極的に関連作品に言及しながら世界文学ネットワークの一部として *JW* を位置づけようとする試みがなされていたことを示した。また、ソネット連作“Time”も、時系列に即して記述されている“Travel Diary”とは対照的に、日中戦争という事象が孕んでいる問題意識について、グローバル・ヒストリー的な歴史叙述を取り込みながら地域の区別を超えて描き出している。*JW* は西洋人が東洋を描くというコロニアルな枠組みを越えて、英語圏出版市場やグローバルな問題意識など、1930年代社会を取り巻く様々な情勢を反映した作品である。

主要参考文献

- Auden, W. H. and Christopher Isherwood. *Journey to a War. The Complete Works of W. H. Auden: Prose and Travel Books in Prose and Verse. Vol. 1: 1926-1938*. Princeton UP, 1996, pp. 491-689.
- Coats, Jason M. “Sequence and Lyric Narrative in Auden and Isherwood’s *Journey to a War*.” *Narrative*, vol. 22, no. 2, 2014, pp. 169-184.
- Fleming, Peter. *One’s Company: A Journey to China in 1933*. Charles Scribner’s Sons, 1934.
- Fuller, John. *W. H. Auden: A Commentary*. Faber and Faber, 1998.
- Fussell, Paul. *Abroad: British Literary Traveling between the Wars*. Oxford UP, 1982.
- Mendelson, Edward. *Early Auden, Later Auden: A Critical Biography*. Princeton UP, 2017.
- Walkowitz, Rebecca. *Born Translated: The Contemporary Novel in an Age of World Literature*, Columbia UP, 2015.